

新任のご挨拶

(公財) リバーフロント研究所 代表理事 宮村 忠

ここ10年ほど、旧海軍の街を度々訪ねてきました。明治以後、帝国海軍の鎮守府が設置された神奈川県横須賀・広島県の呉・長崎県の佐世保・京都府の舞鶴の軍港都市は、特異な都市河川の風情をもっています。氾濫原がわずかしがなく、水資源の確保が容易ではないので、海軍技術の粋を集めて難題の解決にあたってきました。これらの旧海軍水道は、ほとんど現役のまま文化財になっています。佐世保の海軍史跡をめぐって空港へ向かう途中、同行してくれた知人が、「宮村川があるので、寄ってみませんか」と話をもちかけてくれました。興味津々、私の名の川へ案内されました。

佐世保市の南郊外、ハウステンボスに隣接する早岐港の北に、長さわずか5kmほどしかない小さな川ですが、「宮村川」の案内板がありました。小規模の水田があり、川岸に宮小学校と宮中学校が並んで建っていました。この辺りは、佐世保市の宮地区と呼ばれ、合弁前は旧宮村でした。宮村を流れる川なので、宮村川と呼ばれていたのでしょう。現在は、長崎県管理となっています。

左岸側の水田と小学校・中学校に対峙して右岸側は小高い崖地が続きます。崖の下方にゆるいスロープがあり、地下に向かって大人の背丈ほどの出入口から洞窟遺跡「無窮洞」がありました。その中に入って驚きました。入口は狭いのですが、中はゆったりした高さがあり、メインには教室があり、周辺には炊事場や整理棚などが配置されていました。第二次大戦下の宮小学校の防空壕で、しかも、約600人の生徒達が、校長先生の指揮のもとに、クワ・ノミ・ツルハシを使って掘ったものだそうです。

岩壁に「無窮洞」と大きく彫られた下に「工事概要」が掲げられており、「本工事ハ昭和十八年八月二十九日起シ、同二十年八月十五日炊事場ヲ未完成ノママ停止セリ。作業ハ一切外部ノ労力ヲカリズ、爆薬ヲ用ヒズ、職員生徒児童ノ手ニヨリ、ツルハシ、ノミ、カナヅチ、クワヲ使用セリ。底面積凡七十坪、内四十坪ヲ板張りトシ、映画場ノ設備ヲモ施セリ」。板張りの教室には、教壇もあり、倉庫もあり、空気穴の前には農家の稲コキ千歯が備えて通気性を良くしていたらしい。その防空壕は、崖を構成している角礫凝灰岩の岩盤を削り取って造られていました。実際に二度ほ

ど全校生が避難したことがあったらしく、長崎の原爆投下後に、多くの人達がここへ運ばれてきたそうです。

佐世保の宮村川とは別に、私のふるさとの川は、隅田川です。代々隅田川のほとりに住み続けています。隅田川を歌った「花」は、明治33年11月に発行された滝廉太郎の祖曲「四季」の春の部にあたる名曲で、武島羽衣の詞と重なって隅田川を格調高い河川像に引きあげています。

歌が醸し出す隅田川の風情とは別に、私の「ふるさと」隅田川は、佐世保の宮村川と共通して、戦跡の佇まいです。

昭和20年3月10日、アメリカの巨大な爆撃機B29が投下した無数の焼夷弾によって焼きつくされ、10万人をはるかに超えた死者を出してしまいました。隅田川は戦跡ということになります。宮村川と隅田川は、戦跡の繋がりというわけです。糝てて加えて、第二次大戦の戦跡になる22年前、関東大震災によって、隅田川の周りは焼土と化し、10万人の死者を数えました。わずか四半世紀の間に、10万人以上の死者を出す大災害を二度も経験してしまいました。

必ずしもものどかな佇まいを連想させないとはいえ、私は毎日新大橋付近の隅田川と寄り添っています。北に1km上れば両国橋です。南にほぼ同じ距離を下れば清洲橋です。ほんのわずか離れただけなのですが、私のふるさと感は、新大橋から眺める隅田川で、両国橋も清洲橋も他の地なのです。なんともやっかいなことで、自ら反省しようとするのですが、わがままな下町暮らしなのです。ただ、子供の頃、まだ隅田川に背の丈の高いコンクリートの壁（防潮堤）が造られる以前は、それほど狭いふるさと感ではありませんでした。私の住まい近くの隅田川は、掘り込み型の河道でしたので、もう少しスケールをのばしたふるさとの川でした。

関東震災の際、隅田川に架かっていた橋梁群は、すべて焼却がひどく、たった一つ新大橋だけが健在でした。多くの人々が、新大橋を渡って避難をしました。その後震災復興によって続々と名橋が誕生しました。新大橋は、新たに生まれた鉄の橋に混ざって隅田川名橋群の1つとなりました。二度の大災害の最中には「道」となって、人々から「お助け橋」と呼ばれた新大橋が災害の記憶を伝えているのかもしれない。

そんな街が、私のリバーフロントです。



宮村川ほとりの無窮洞の入口と内部